
魔法先生ネギま！～未完成の人間だった男～

紅 幽鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！～未完成の人間だった男～

【NZコード】

N0767V

【作者名】

紅 幽鹿

【あらすじ】

少年、【來伊龍牙】^{くるいりゅうが}は神に殺された。神が彼を殺した理由は【未完成】だつたから、その理由で彼を殺し【未完成】のまま【ネギま！】の世界に転生させると言った。

神は彼に対して願いを叶えてやると言った、そして、彼は人間を止め聖遺物を手に入れた。

これはその少年が魔法先生ネギま！の世界を駆け抜けれる物語

第零話～プロローグ（前書き）

今度は続けてみせる！！

この小説は更新が遅くなるかもしれません

第零話／プロローグ

俺の名前は來伊龍牙くるいりゅうが、人間が嫌いな普通の高校生だ

「此處は何処だ？」

俺は辺り一面、白い空間を見て呴く

「ここは“座”よ・・・」

俺の呴きに答えるように誰かの声が聞こえた。俺は声がした方向をみると、白い翼を生やした女性がいた・・・新手の痴女か？

「アンタは？」

「あら、初対面のレディーに対して痴女とかアンタは失礼じゃない？・・・“坊や”」

・・・この女は何が言いたいんだ？

「フフ、ごめんなさいね。単刀直入に言つわ・・・【貴方は私が殺しました】」

「・・・それで？」

「え？」

俺が言った言葉に目の前の女性は、何言つてんだこいつと言ひ顔をする

「俺を殺したのには理由があるんだろう？その理由を言ってくれ」

「フフ、賢い坊やは好きよ・・・理由は簡単よ貴方は【未完成】だつたからよ」

「未完成？」

「ええ、【未完成】・・・貴方はどうやって人が生まれたと思う？？」

唐突だな・・・確かに・・・

「神が最初の人間・・・アダムとイヴを創り、その一人が樂園乐园を追放された後その二人がたくさんの子供を産んだ・・・で良いか？」

「ええ、ある程度OKよ」

「それで俺が未完成というのどういういつ関係があるんだ？」

「まあ、その話は置いといて・・・」

置いておくのかよ・・・

「貴方は人間が【未完成】だと思つ？」

・・・人間が【未完成】？」この言葉を聞いた時、俺は何も考えずに答えを言っていた

「人間は【未完成】じゃない、人は完成されている」

「その通りよ」

眼の前の女がおれの答えを聞き口を歪ませながら笑う・・・なるほど、そういうことか・・・

「大体わかった。人間はお前ら神によつて【完成】という形で生み出される・・・だが、俺は【未完成】として生まれた・・・【完成】の中に【未完成】がいるのはおかしい、だからあんたら神は世界に悪影響が起こる前に俺を殺した・・・違うか?」

「本当に貴方は賢いわね、坊や。その通りよ、それで貴方には別世界に転生してもいいわ」

「・・・【完成】という形でか?」

俺が【完成】になるだと?・・・絶対に嫌だ・・・

「いいえ、貴方は【未完成】のままで行つてもいいわ」

「・・・何故?」

「貴方が転生する世界の名前は【ネギまー】と言つ世界なのよ」

・・・なんだその世界は?焼き鳥の世界なのか?

「いいえ、魔法使いがいる世界よ。そこに貴方という【未完成】を入れて、世界がどう変わるか楽しみたいのよ・・・

「神がそんなのでいいのか?」

俺の疑問に神は

「ふふ、私は自分自身の【渴望】に忠実なだけ、【他者の人生を見
続けたい】つていうね」

「……分かった。その世界に行つてやる」

その世界に行くことを言つと……

「ありがとう坊や。それじゃあ、転生前の特典で四つだけ願いを叶
えてあげる……わあ、貴方の願いを言いなさい」

「なら一つ目だ……俺は人間を止めたい……」

「理由は？」

「簡単だ、自身が人間と言う事実を認めたくないからだ」

「本当に面白いわね。それじゃあ、人間以外の何になりたいの？」

「そんなもの、ずっと前から決まっている……俺は【吸血鬼】・
・【始祖の吸血鬼】になりたい」

「分かつたわ。二つ目は？」

「聖遺物をくれ……俺の渴望が叶えられる、聖遺物を……」

「ふふ、分かつたわ。貴方の渴望を教えてもらひうわね

そう言って、神は俺の頭に手を載せ……」

「貴方の渴望は【完成という未完を未完という完成を味わいたい】・
・・・面白い渴望ね・・・貴方にはこの聖遺物を渡してあげるわ」

そう言って、神は俺に禍々しくどこか美しい雰囲気を出している死
神が持っているような鎌を渡してきた

「その聖遺物の名前は【死神持つ処刑鎌】・・・その壱、ギロチン
が誕生する前から罪人たち狩っていた処刑具よ」

そういつた後に、鎌・・・死神持つ処刑鎌デスサイズが光ったと思つた瞬間、
俺の体の中に入った

「それで、三つめと四つ目は？」

神がワクワクした表情で言つ・・・だが

「後はどうでもいい・・・」

「どうでもいい?！」

神が驚いたように言つ・・・だつて・・・

「俺は、自分自身の欲を叶えられたんだ、後はどうでもいい
もいいの?」

「じゃあ、無限の剣製とか魔力無限とか身体能力最大とかしなくて
もいいの?」

「聖遺物と始祖の吸血鬼の肉体があれば十分だ、それに、力がある
ことは安心できるが有り過ぎても困る」

「せつ・・・・なり、三つ目と四つ目は私が勝手に決めるけど、良い坊や?」

「好きでいい・・・」

俺の答えに満足したのか神は笑顔になり・・・

「せつ、ならこれでお別れよ」

神がそういった瞬間、俺の視界が暗転した・・・

（）

・・・数分、數十分、もしかしたら数時間たつたのか分からないが

俺は意識を浮上させる

「・・・・・どうやら転生したようだな」

俺は辺りの景色を見渡して言つ・・・そして、手の中にあった手紙を見ると・・・

坊やへ

この手紙を見ているということは転生に成功した様ね。

今、坊やがいる時代は大分裂戦争ベルム・スキスマティクムが始まる二十年前よ

それと、肉体の方は始祖の吸血鬼だけど、吸血衝動は無くしたわ、
それと、血を吸つても相手を【血の一族】・・・つまり、同族には
できないわ

坊や、三つめ四つ目の能力だけど、三つ目は【才能】にしておいた
わ。効果はその名の通り、ありとあらゆる才能を所持できるわ。四
つ目は【眷属】よ。何ができるかはお楽しみよ。

そして、坊やは本当に面白いから聖遺物に「一百万の良質な魂を喰わ
せておいたわ。

それじゃあね

神より

僕が手紙を読み終えた後、手紙は灰になつた・・・それにしても、
氣前がいいな、良質な魂一百万か・・・

それと、大分裂戦争ベルム・スキスマティクムと言つものが始まるまで、二十年はあるか・・・
さて、それまでに聖遺物能力とその他について調べておこう・・・?

第壱話～出会い～

初めてまして、來伊龍牙だ。

俺がこの世界に転生してから二十年が経つた。

うん？早すぎだろつて、そんなもの如何でもいいだろ

さて、早速だが俺が持っている聖遺物【死神持つ処刑鎌】について

教えよう形態は 人器融合型であり武装具現型でもある。

人器融合型の時は右腕から漆黒の鎌を生やせ、武装具現型は漆黒の死神が持つていそうな鎌になる

さて、これぐらいでいいかな？他にも創造が使えるが、能力はまたいつか・・・

そんな事よりも、俺は今戦場に向かっている。

俺の体は始祖の吸血鬼の為、血の匂いに敏感だ・・・そして視力ではたつた三人の人間と大勢の軍隊が戦う直前だつた・・・さて、三の方を助けてますか・・・

「形成（Y e t z i r a h） 死神持つ処刑鎌！」

俺の手に漆黒の死神の鎌が出現する・・・

「さあ、楽しい狩りの始まりだッ！？」

よう、俺は世界最強の魔法使いになる予定のナギ・スプリングフィールドだ！俺は今起こっている大戦を終わらせるために連合側で紅き翼の仲間と参加している。

今は回りを数万という数で覆われているが俺たちの敵じゃねえぜ！

「おい、ナギこれは数が多くすぎるぞ！」

「うかせーぞ詠春。千の雷使うから巻き込まれんなよ」

は範囲が限られます。」

・・・俺の中の一人の【詠春】が文句を言い【アルビレオ・イマ】

が下がりながら言ひ、そして俺が千の雷を使おうと、詠唱をしようとした瞬間・・・

敵軍から断末魔が聞こえ、次々とバラバラになつた肉片が空中に浮く・・・その肉片が敵兵のものだと気づくのには時間はかからなかつた・・・ツツ！一体何なんだ？！

そして、敵兵たちを殺していたであろう人物が俺らに近づく・・・
そいつは眼が赤く髪が黒色で、黒い服装に白色で・・・確か【カド
ウケウス】と言うもの描いてある血に染まつた手袋を嵌め、血に濡
れた漆黒の鎌を持つた男だつた・・・どんな奴でも見たら敵だと思
う姿に俺たちは敵だとは思えなかつた・・・

「初めまして、千の呪文の男くん？」
サウザンド・マスター

その男の声は何処か美しかつた・・・

「Side out」

「Side 龍牙」

「なんだきす「煩い・・・」「ぎやあ・・・」

俺は獲物を【死神持つ処刑鎌】^{デスサイズ}で切り裂く

「さあ、俺を楽しませろ！――！」

俺は始祖の吸血鬼の身体能力を使い【死神持つ処刑鎌】^{デスサイズ}で切り裂いていく、

「フツ！」

俺は【死神持つ処刑鎌】^{デスサイズ}を投げ、投げられた【死神持つ処刑鎌】^{デスサイズ}は次々と獲物を狩っていく・・・俺は恐怖で怯えてかこの場から逃げ出そうとする敵兵を見つけ・・・跳躍

「ヒイイイイイイイ――――――！」

「フン！」

そのまま、怯えていた敵兵の心臓を貫き、引き抜く・・・

卷之三

俺は手袋についた血を舐める

「アサヒセイジ」

敵兵数人が俺の背後から攻撃を仕掛けるが・・・

「無駄だ
・
・
・
」

俺の手に戻ってきた【死神持つ処刑鎌】で首を切り裂く・・・敵兵
が減つていき俺は囮まれていた人物がどういう人物か分かつた・・・
確か千の呪文の男ナギ・スプリングフィールドという奴だったな・・・
・俺はそのまま、跳躍し三人の前に降り立ち・・・

「初めまして、千の呪文の男くん？」
サウザンド・マスター

と言つた。

「お前は何者だ？！」

刀を持つた青年が言つてくる・・・

「ふむ・・・そこ」の青年、刀を下ろしたまえ。俺はお前たちを殺すつもりはない。この敵兵を殺したのは、君たちがピンチに見えたからだ・・・もしや、いらなかつたか?」

「いえ、助かりました。私はアルビレオ・イマとおっしゃいます。貴方は？」

「俺は來伊龍牙……始祖の吸血鬼だ」

「……吸血鬼？！」

三人は驚く……別に驚くことでもないだろ……

「あ、青山詠春あおやまといしゅんだ。龍牙は日本人なのか？」

吸血鬼発言に詠春は顔を引き攣りながら言つ

「ああ、そうだ。」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。龍牙！俺の仲間になれ！！」

ナギは自己紹介をした後に、仲間なれと言つてきた……ふむ、仲間か……

「ああ、良いぞ。お前らといたら面白そうだ」

「フフフ、よろしくお願ひします。龍牙」

「あの強さで、吸血鬼……頭痛が……」

詠春、安心する。私はなるべくなら君の頭痛の種にならないようこうしよう

設定

名前：來伊龍牙くるいりゅうが

種族：始祖の吸血鬼

年齢：四十歳（ただし、肉体年齢は二十代で不老不死である）

身長：182cm

体重：62？

容姿：眼が赤く髪が黒色で、顔は男とも女とも見られる顔、所謂中性顔で、普段はDies iraeに出てくる聖槍十三騎士団の軍服を着ていて白色でカドウケウスの描かれた手袋をしている。ちなみに、肉体操作もでき、女にも口りにもショタにもなれる

好きなもの／好きなこと・血、面白い人物、未完成、完成、動物、魂が輝いている奴

嫌いなもの／嫌いなこと・自分が正義だと信じている奴、大切な人を傷つける奴、人間

所有物：聖遺物【死神持つ処刑鎌】デスマサイズ

能力：才能（ありとあらゆる才能を所持し、使用することができる）

眷族（自分の血で契約している眷族を召喚することができる。）

詳細：彼は神に【未完成】の人間と言つ事で殺され、魔法先生ネギま！の世界に転生した。彼は基本人間嫌いだが、自分が興味を持った人物、老人子供には親切になる。だが、自分が正義だと信じている奴、大切な人を傷つける奴には無慈悲で聖遺物【死神持つ処刑鎌】^{デスサイズ}の餌にする

聖遺物・聖遺物【死神持つ処刑鎌】^{デスサイズ}

位階：創造

形態：武装具現型、人器融合型

創造：？？？【完成という未完を未完という完成を味わいたい】と言つ渴望の具現化

能力：？？？

詳細：もともとはギロチンが生まれる前に罪人たちを狩ってきた鎌で死神が持つてているような形をして漆黒の色をしている。この鎌の中には【ある魂】が入つてているが、まだ目覚めていない

ジャック・ラカン

俺が紅き翼に入つてから一週間が経つた。

ちなみに聖遺物については【殺せば殺すほど強くなる魔法道具】と言つておいた。そしたら、滅茶苦茶ひかれたがな・・・

ここで俺の一週間に起つたことを教えよう

赤き翼の一人、【フライリウス・ゼクト】から魔法を教えてもらつている。まあ、俺の能力にある【才能】のおかげで上級魔法を三日で覚えたら、皆にバグ扱いにされたのも良い思い出だ・・・

そして現在。

「ナギ。おまつ、何肉を先に入れてるんだよー。」

「いいじゃねえか。『言いもんから先でよ』

「トカゲ肉でも『言い』のかのう?」

「マスター師匠、早まつてはいけない・・・」

みんなで鍋パーティーをやつている。・・・でか、血が飲みたい・・・

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』と呼び習わすそうですね」

そんな慣わしねーよ

「ナベ・シヨーグンー!?

発音おかしいぞ

「つ、強わうじやな」

何処が?

「姫子ちゃんにも食わしてやりた〜くら〜の皿だな」

姫子ちゃん?

「姫子ちゃんとは誰だ?」

「ああ、オステイアの姫御子の」とじやな?」

「まあ……戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「その戦だが……やはつどいにも不自然に思えてならん」

俺が次の肉を食べようとした瞬間……俺の真後ろから大剣が飛んできて鍋が空を飛んだ。

そして、宙を舞つた肉たちはナギ、スター師匠、アルに全て回収された。

「食事中失礼〜ッ。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン!!
いつちゅやうづばッ!!」

・・・・・殺す

「ハハハ……てめえは首をちゅん切って・・・・・・

「フフ……食べ物を粗末にする者・・・・・・・・

肉を奪われた俺は吸血鬼の筋力で鍋を頭から被つた詠春が縮地・瞬動でラカンの前後に

「殺す

「斬る

「つおおつー

同時に一つの蹴りと一つの斬閃。

が、ジャック・ラカンは難無く避ける

だが間を空けず左右からお互いをカバーしながらラカンを確実に追い詰めていく。

「ちよつ、タンマタンマ。お前らマジで強いのな。ちょい待たね?」

「ふやけるなつー やる気なら本気を出せー!」

「へつ、ソースか。だがあんた達の情報はリサーチ済みだぜつー?」

「ちらに向かって四つのカプセルを投げてくる。

「情報その一。生真面目剣士はお色氣に弱い」

かなり際どい格好をした半人半靈を喚ばれ動搖した詠春が気絶させられる。

俺？俺は半人半靈を一人捕まえて、血を吸つていますが？

「次は俺だ、坊や・・・・・」

俺は血を吸われ絶命した半人半靈の死体を投げ捨てる

「情報その五。始祖の吸血鬼。弱点なし。特徴、最凶最悪」

「悪いが直ぐに終わらせるぞ・・・・・」

「おこおこ。何言つてんだよ?」

俺は意識を一点に集中させ、腕をジャック・ラカンに向かって伸ばし……

「私は始祖の吸血鬼、夜の世界に君臨するもの……我が眷族よ。
我が血を糧にこの世界に現出せよ！飛翔せよ！漆黒の不死鳥！！」

次の瞬間俺の腕から血が出血し、俺の背後に巨大な魔法陣が出現し、その魔方陣の中から漆黒の不死鳥が出てくる

「？」

ナギ、ジャック・ラカン、アル、^{マスター}師匠が驚く

俺はジャック・ラカンが呆然としているつひこ、漆黒の不死鳥に命令を下す

「吹き飛ばせ！…」

「クオオオオン！…」

俺の命令を聞いた漆黒の不死鳥が翼を広げ、ジャック・ラカンに突進する

「は？！グボラ？！」

気づいた時にはもう遅い、ジャック・ラカンは漆黒の不死鳥に吹き飛ばされた…

後日、ナギとジャック・ラカンが十三時間にも及ぶ激闘を繰り広げ、いつの間にかジャック・ラカンが仲間になつた。

俺にもリベンジ挑んできたが死神持つ処刑鎌で半殺しにしておいた。^{デスサイズ}

・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0767v/>

魔法先生ネギま！～未完成の人間だった男～

2011年10月7日23時33分発行